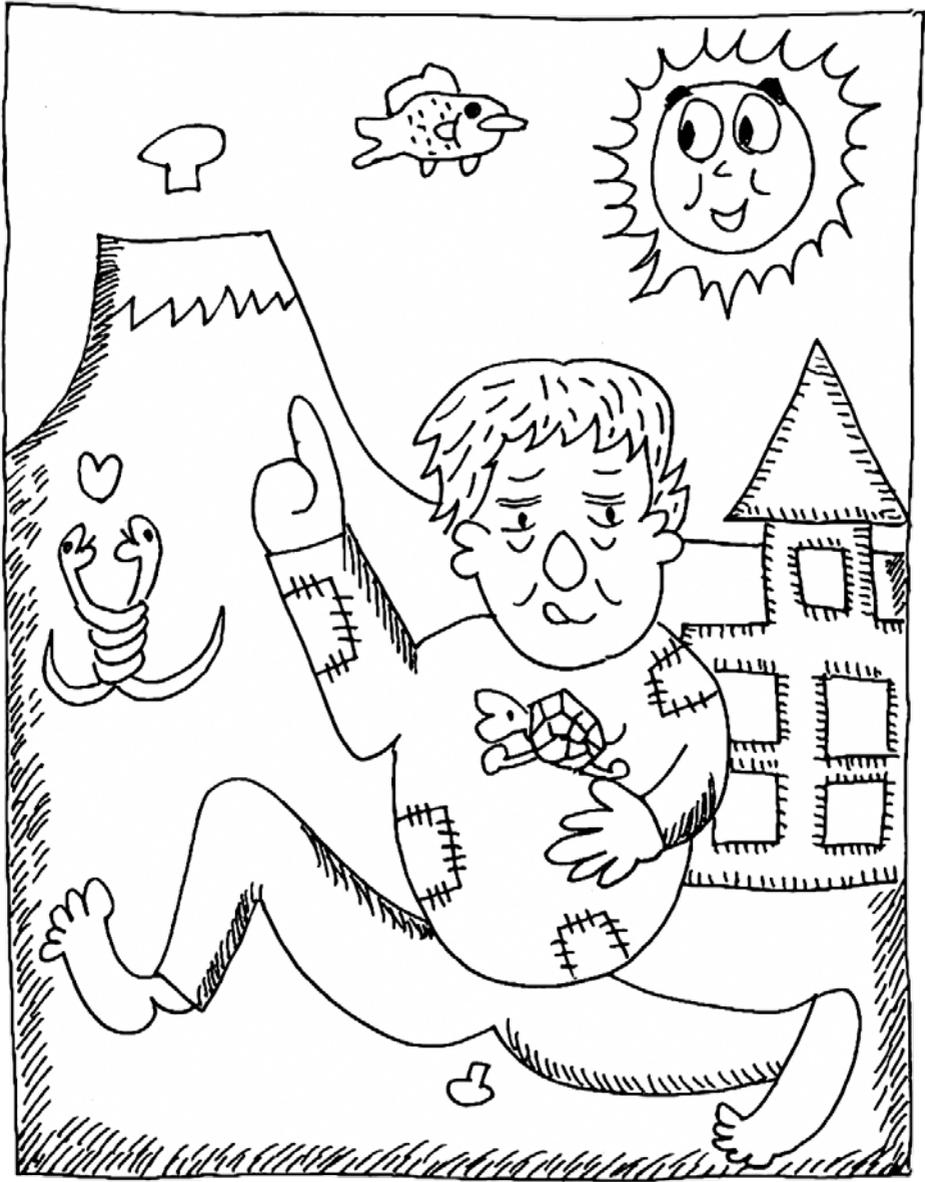


愚痴老人昔話

昭和落ちこぼれ漫画編集者の独白+α



文・イラスト 芦川淳一

ODAさん、失礼しました

おだ辰夫さんに申し訳ないことをしたのは、週刊漫画ゴラク編集部に勤務していたころのこと。ぼくはおださんの担当だった。

受け取ったおださんの原稿に「デイパック」と書いてあり、これは「デイバッグ」の間違いだろうと「バック」を「バッグ」に勝手に書き換えてしまった。デスクのチェックもそれで通った。当時は「デイパック」なる小さなリュックが出始めたときで、ぼくは流行についていけなかったのである。

なんとも恥ずかしい思い出だ。おださん、すみませんでした（汗汗あせ）

ペンネーム

ぼくは小説家になりたかった。なったらペンネームを「和氣二作（わけいつさく）」にしようと思った。

編集者時代、どんな席だったか忘れたが、隣にいた今度デビューするという若い漫画家（そのときはまだ誰かのアシスタント）が、

「ペンネームは和氣二作にします」

というではないか！

やられた！とショックを受けつつ、

「その名前は、あれでしょ、原田芳雄の……」

「そうです。よくわかりましたね」

彼は目を見開いた。

和氣二作とは「さらならこんには」というテレビドラマで、原田芳雄が演じていたカフェのマスターの名前なのである。

ぼくは原田芳雄ファンだが、彼もそうだった。そして、ふたりともその役名がカッコいいからペンネームにしようと思ったのである。

ぼくの脳裏には、このことが強烈に刻まれているが、和氣氏のほうは、ペンネームの由来をいい当てた編集者のことを覚えているだろうか。

その後、和氣氏は「女帝」や「ごくつま刑事」などで人気漫画家になった。

ぼくは和氣氏に、いつか作家になったら「和氣二作」をペンネームにするつもりだったが先を越された、といったかどうか記憶にない。

もし彼がほかのペンネームにして、ぼくが「和氣二作」にしたら？ ペンネームの力でベストセラー作家になっていたに違いない。

持ちこみ漫画家の怨念

編集部では毎年一月に新宿のホテルで新年会を開催していた。

ぼくが会場の出入り口付近にいと、先輩の編集者がエレベーターから出てきた。そのあとに、同じ箱に入っていたふたりの若い男性がつづく。やがて声をひそめた会話が聞こえてきた。

「あいつだよ。おれの原稿を放り投げて、貴重な時間を無駄にしたっていったやつ」

ひとりが怨念のこもった顔をして先輩の後ろ姿をにらんでいた。呪わんばかりに……。

ふたりは、おそらく誰かのアシスタントなのだろう。アシスタントも新年会に参加OKだった。

先輩は、出入りの印刷業者や写真屋に対してずいぶんと横柄な態度をとる。持ちこみの新人漫画家に対してもつらい態度をとっていたのだろう。先輩は持ちこみだ者のことは忘れているだろうが、相手はおそらく死ぬまで忘れないだろう。

ぼくは、ものにならない原稿を持ちこまれても恨まれないような対応をしようと肝に銘じた。

先輩は五十代前半で早死にしたが、彼（ひよつとするとかなりの持ちこみ漫画家たち）の怨念のせいではないと思いたい。

追加料金百万円

ぼくは数年にわたって新年会の幹事と司会をしていた。一九八七年の春に会社を辞めたので、その年の新年会が最後のお役目になった。その年は例年よりも多くのアシスタントが来場していた。彼らはここぞとばかりに食べ、かつ飲んだ。ついに酒が切れてしまい、ホテルの会場係りにどうしましょうと訊かれた。追加してくださいと、ぼくはいった。バブル直前でけっこう景気がよく、雑誌も売れていたもので、気が大きくなっていた。

あとで酒の追加料金が百万円だと判明した。経理部長に怒られたが、どうしようもない。反省して、来年の新年会は節約しようと思ったが、春に辞めたのでつぎはなかった。

アシスタントたちは、日頃の鬱憤をはらすために、思い切り飲んだのだろう。そう思うとなんだかよいことをしたような気がする。

カレーは共栄堂

他人の強引さによって自分の意にそぐわないことになり残念な気持ちになったことは、ずいぶんあとになっても悔しさとともに思い出すものだ。それが些細なことでも。

いま思い出したのは、神保町のカレー屋のことである。勤めていた出版社のすぐとなり共栄堂というスマトラカレーの店があった。というか、いまでもある。

ぼくは、ほかの店にはない小麦粉を焦がした少し苦くて辛い独特の味のカレーが好きで、週に2回から3回は食べに行っていた。

ある日、昼食を食べるために席を立つたとき、先輩のHさんが一緒に行こうよという。

「共栄堂で食べるつもりですが」

と応えると、顔をしかめ、カレーならペルソナがいいという。ペルソナとは欧州カレーの店で、じゃがいもがついている。神保町での有名店ボンデイと同じタイプだ。

ぼくは共栄堂がいいのだが、H先輩は好きではないらしく、ペルソナへ行こうとしつこい。しかたなくペルソナにつきあつた。それなりに旨いことは旨い。だが、ぼくは共栄堂のカレーを食べたかったのだ。大げさかも

しれないが、短い人生、食事の回数は決まっているのだから、なるべく好きなものを食べておきたいではないか。ぼくは、かなり不満だった。

おなじことが、2度あつた。3度目は我慢できずに断固拒否した。

「ぼくは共栄堂に行きますー!」

宣言して、H先輩を振り切つたのである。

後悔しているのは、H先輩の主張に逆らえず、2度ペルソナで食べたことだ。たつたの2度だと思うかもしれないが、ぼくの気持ちとしては、2度も!なのだ。この2度が悔しくてたまらない。いまH先輩に会つたら、文句をいいたいほどだ。先方はすっかり忘れているだろうし、こんな根に持つているとは露にも思わないだろうが。

つい先日、共栄堂を訪れ、いつも注文するポークのソース大盛りを食べた。以前と変わらない味で、たいへん満足した。

ちなみにペルソナはとつくに閉店している。

連載漫画が落ちたとき

いまではあり得ない話。

四十年前でも、大手出版社ではないことだが、弱小出版社では、よく起こったことである。

表紙にタイトルが載っている連載作品が、実はまったく載っていない！なんてことがあった。

大手は原稿の締め切りを表紙の入稿締め切りに合わせていた。つまり、原稿が締め切りに間に合わなければ、代替原稿を入れ、表紙のタイトルも換えた。

ぼくの勤めていた出版社は、表紙が刷り終わっていても、印刷所がもう駄目だというまで原稿を待った。原稿が間に合わなければ、新人持ちこみの代替原稿に差し替える。当然、表紙にタイトルがあつても、誌面には載っていないということが起こる。

なかでもよく落ちた連載作品は、K原I騎・原作、H田K仁信・画の「男の星座」だった。

発売日の朝、編集部が電話が鳴り始める。購読者からで、なぜ表紙に載っているのに掲載されていないのだ？という質問がお叱りの電話だ。

多忙なK原氏の原稿が遅れて、作画が間に合わなかったと、誠意をこめて説明し謝罪すると、たいていは仕方ないと納得してくれた。

ただ、そうは簡単にいかないこともあった。ドスの利いた声で、

「うちの若いもんたちに読ませてんだ。載ってないじゃ済まされないんだよ。おい、どうしてくれるんだ！」

てな感じで、すぐまれるのである。

なんども事情を説明し、平謝りに謝って、雑誌を送っていただければ、送料こみで雑誌代金をお返しします：などと応対していると、少しずつ和やかになり、「あんちゃんも大変なんだな。まあいいや。これからはちゃんとしてくれよ」

ということで収まった。ぼくが応対したなかでも、すくなくとも二度か三度は同じことがあつたと思う。同じ人物ではないが、おそらく同業者で同じくその筋の偉い人だつたに違いない。

ちなみに、ほかの作品が落ちても、電話ですごまれることはなかった。

「先生」と呼ばれるほどの馬鹿でなし

少し前の項にも書いたが、ぼくは漫画編集者時代、新年会の幹事と司会をやらされていた。

毎年、巨大な白い色紙に、漫画家たちに寄せ書きをしてもらうのが慣習だった。社長が社長室に飾りたいというのである。後年は、受け付けのうしろの壁に貼って

あつたようだ。

司会のぼくは、歓談している漫画家たちに声をかけて、漫画のキャラなどを色紙に描いてもらっていただけだ。ふと見ると、コラムを連載中のなぎらけんいち氏が色紙を見上げている。なぎら氏にも一筆なにか書いてもらおうとしたのだが……名前が思い出せない。それで「先生、なにか書いていただけませんか？」と声をかけた。すると間髪を入れず「オレは先生じゃないっ！」と怒鳴られた。

漫画家の人たちは、昔から少年誌が読者に対して「先生」づけをさせようと仕向けて(?)いたせいで、そう呼ばれることに慣れてはいるが、そうでない人には違和感があるのだろう。漫画家であっても、谷岡ヤスジ氏は、ぼくが初めて会ったときに谷岡先生と呼んだら、「先生と呼ばれるほどの馬鹿でなし。ぼくのこととは谷岡と呼んでください」と、いった。

だいたい「先生」というのは学校の教師など生徒を教え導く人のことだ。先生と呼ばれる馬鹿は政治屋か三百代言などだ。谷岡氏にそういわれたときには、深く納得したものである。

ただ「先生」という言葉は実に便利な言葉だ。名前

をど忘れしたときには「先生」と呼ぶだけでよいのだから。なぎら氏に怒鳴られたぼくは、名前が思い出せないまま、頭を下げて、失礼しましたと詫びたあと、再度書いていただけないかとお願いした。するとなぎら氏は「いいよ」

快諾して、絵入りのコメントを書いてくださった。気の利いたコメントもさることながら、絵も達人だった。

M野M美氏とのこと

ぼくは少しおかしくなっていたのだろう。尋常ならざる精神状態に足を踏み入れそうになっていたというべきか。

原稿を描いているM野M美氏のうしろ姿を見ながら……

(二撃を加えるにはうしろから殴るか蹴りを一発だけ入れてすぐに離れなければならない。少しでも動作が遅れると、手や足をつかまれてしまう。そうなったら一巻の終わりだ)

足が不自由なM野氏は、とにかく腕が太い。ものすごい臂力と思われる。いったんつかまれたら逃れられず、ポコポコにされるのは必定だ。

(どうやったら勝てるのか……)

なんてことを考えながら、M野氏のうしろ姿を見ていた。

なんでそんな風になってしまったかいうと、M野氏の連載原稿が毎週遅れに遅れて、ギリギリまで印刷所を待たせることが日常化しており、ぼくは神経をすりへらしていたのである。

だいたい週刊誌連載などM野氏には無理な話だったのだ。それをやってみたいといいだし、仲のよい編集者Yに連載を打診した。Yはぼくの先輩で、M野氏の意向に是非沿いたい、体力に自信がないから、若い編集にまかせようといい、ぼくに白羽の矢が立ったというわけである。

なぜ、ぼくかという、M野氏の描く漫画のファンであつたからだ。ぼくは週刊誌連載は無理でしようといつたのだが、やる気満々だから大丈夫だとY先輩はいう。とてもそうは思えなかつたのだが、ぼくを選んでくれたことが嬉しくもあり、やってみようと担当を引き受けた。これがいけなかつた。

M野氏は、気分がのらないとペンをとらない人で、さらに締めきりが迫らないとやる気がおきないという漫画家だつた。

しかも、ビッグコミックオリジナルでも不定期連載を持つており、これが入るとさらに忙しくなる。再三にわたつてぼくはオリジナルの漫画のベタ塗りをした。

「うまいですねえ」

ただ待つているだけのオリジナルの編集者の言葉を聞き流しながら、せつせとベタを塗つた。

早く描き終えてくれないと、こつちの原稿にとりかかつてくれないから、やむを得ず他誌のベタ塗りをしていたのだ。

ビッグコミックオリジナルのような一流漫画誌は、前にも書いたが、表紙を刷る前に原稿の締切りを設定し、それを過ぎると容赦なく落としてしまう。表紙にタイトルが載つていてもなかにはない、なんていう無様なことにはならないのだ。

なんでうちの雑誌は綱渡りなことをやっているのか……黙々とベタ塗りをしながら、どうにもやるせない気持ちになつたものである。

雑誌は金曜発売。日曜日の夕方までに原稿が上がらないと代替原稿を載せることになる。M野氏の原稿は、ギリギリ間に合う日曜の夕方上がるのが通例になつてしまった。それまでに上げれば大丈夫だとM野氏に知られてしまったわけだ。それは印刷所で働く人た

ちのの休日出勤を余儀なくしており、彼らの犠牲の上
に成り立っていたのである。

しかも、日曜日夕方になんとか上がるとはいっても、
つねにぼくが仕事場に詰めているという条件つきだ。詰
めていないとなまけてしまうので、ずーっとぼくはM野
氏に張りついていなくてはならない。だから、編集部へ
の出勤は免除されていた。家からM野氏の仕事場へ直行
する毎日だったのである。

ぼくは、M野氏の担当をする前は、六本木のクライマッ
クスというディスコに毎土曜日に行くのが楽しみだった。
パンクやスカのリズムにのって踊りまくるのである。と
ころが、M野氏の担当になってから、友人たちと土曜日
に踊りにいけなくなってしまう。……まあ、これは落
ちこぼれ編集者のしょうもない愚痴だけれど。

また、日曜日に従姉の結婚式があつたのだが、それも
欠席せざるを得なかつた。

選挙は、選挙権を得てからこれまで一度だけ投票でき
なかつた。それもM野氏のせいである。

編集者として忸怩たる思いもあつた。それは、連載
中の作品に対してM野氏に、

「面白くない」

と、訊かれるときのことだ。

これが面白くないのだ。話は西遊記。当時、テレビ
で西遊記が放送され、一時的な西遊記ブームがあり、M
野氏もそれにのつた形だ。それについても、なんでだよ
という疑問があり、話をつけたY先輩にも訊いたのだが
本人がやりたがっているのだからという応えしか返つて
こなかつた。才能ある漫画家が週刊誌連載に意欲を燃
やしているのだから、つべこべいうなという態度である。

西遊記は、ご存じのとおり、孫悟空が暴れて釈迦に
諭され、その後、三蔵法師たちと天竺を目指すという
展開なのだが、M野氏の漫画はいつまで経っても、悟空
が天界で暴れるまま進捗しない。原稿執筆に余裕がな
いから、同じような暴れるシーンばかりを描いてお茶を
濁している案配なのである。

だが、M野氏に面白くないといったら、別室に閉じこ
もつて描かなくなるか、怒つてもう描かないと投げ出す
かのどちかになるのは目に見えている。だからしかたな
く、

「面白いです。面白いのですが、早くお釈迦様に諭され
て天竺に行く話にしませんか。独自の妖怪など出して
破天荒な展開にしましょう。読者はそれを待っているは
ずです」

というしかなかった。それでも、悟空は暴れるままなのである。

原稿締め切りは綱渡り、内容に関しては本心をいえない……こんなことが半年以上つづいたせいで、ぼくはM野氏のうしろ姿を見ながら、どうやったら一撃を加えることができるのかを思案するような精神状態に陥っていたのだった。

そして、ついにぼくは、我慢の限界を超えて爆発することになるのだが……その前にひとつ。

M野氏もぼくも喫煙家だった。銘柄は忘れたが各々別の銘柄だ。

漫画を描いているM野氏のうしろで煙草を吸っている、と、

「なんだこの臭いは！ なに吸ってるんだ」

M野氏に詰問され、銘柄を教えると、

「オレの煙草以外の臭いは嗅ぎたくない」

ぼくは煙草を吸えなくなってしまった。

あと、もうひとつ。

原稿を描くM野さんと雑談をしているときのことである。とつぜん、M野氏は仕事机の前を離れた。トイレ

だと思っていたら、何時間も帰ってこない。なぜなのか、ぼくがなにか機嫌を損ねたのか、三人のアシスタントたちに訊いても、さあと首をひねるばかり。

しばらくして、アシスタントの女性がふと顔を上げて、「ひよつとしたらM先さんのことを話したからかもしれないよ」

というではないか。そういえば雑談のなかで、「○誌にM崎Mさんが新作を描いてましたね」

といった覚えがある。彼女は、M崎さんと先生は微妙なんですよねという。なにがどう微妙なのか、彼女にもよくわからないようだったが。

ほかの男性アシスタントあたりは、そんなことでと否定的だが、それ以外に誰も理由が思い浮かばない。しかたなく、ぼくはM野氏がこもっている部屋の前で、

「M崎さんのことを話したことがいけなかったのでしょうか。ただ、雑誌に載っているといっただけでなのですが」

すると、M野氏は、

「おれの前でM崎の話はするな」

というのだった。女性アシスタントの推理は当たっていた。

平謝りに謝ってなんとか気を取り直して原稿に戻ってもらったのだが、それまでに、なんと六時間も経って

いた。

こんなこともあった。

土曜の深夜、明日早朝には上げておくから帰つてくださいといわれ、それでも待ちますとはいえずにタクシーで帰宅。翌朝、仕事場へいくと誰もいない。メモがあり、そこには、

「ベタ塗りをお願いします」

途中までの原稿のベタを塗る羽目に。数時間ベタを塗りつづけていたら、アシスタントがまず起きてきた。御大はさらにあと。結局、原稿が上がったのは夕方だった。

さて。書きたいことがどんどん出てくるので、ここらで止めて、本題に入ろう。

ずっと張りついていて、明日の朝には上げるから帰ってくれといわれ、しかたなく帰り、翌早朝に訪れると原稿が上がっていない。いつものことだが、ぼくは限界にきていた。

「約束が違います」

口から非難の言葉が出た。

「もう少しで上げるよ。信用できないのか」

M野氏はムツとしているようだが、すぐに上がるはず

はなく、どう見積もつても半日以上はかかりそうだ。

「信用できません」

いつもはそんな言葉は飲みこむが、このときは自制心が働かなかつた。

「なんだあ……信用できないんだつたら、やめちまえ！」

真つ赤になつて怒鳴るM野氏に、

「やめます」

と応えて、そのまま仕事場を出てしまった。

殴りかかるか蹴りつけるようなことはしなかつた。そこまでのパワーは出なかつた。

編集部に電話し編集長に、

「もう仕事をつづけられないので、担当を降ります。相応の処分は覚悟しています」

といった。

M野氏はあわてて編集部に電話したらしく、

「なんだか急に怒りだして帰つちやつただけだね。わけがわからないよ」

なんていつていたそうだ。ほかの編集者が飛んでいったが、M野氏はせつせと原稿を描いて、いつもより早く上がったそうである。

ありがたいことに、ぼくはクビにはならず、担当を代えてもらった。

あとで知ったが、他社の編集部で、ぼくがM野氏を殴ったという噂が流れていたそうである。

M野氏の担当は、連載の話を取りつけたY先輩が引き継ぎ、ほどなく連載は終了した。締め切りがきついいことと、M野氏の執筆意欲がなくなつたためか……詳しくは知らない。悟空はついに釈迦に会わないままだつたと記憶している。

Y先輩は、ぼくに、「君には失望したよ」

といった。ぼくは怒りを感じなかった。なんとでもいえという気分だつた。担当を離れた解放感にひたつていたということもある。

Y先輩は、長いあいだ休んでいたつげ義春氏に新作を描かせた優秀な編集者だつたということを付け加えておこう。

いろいろと苦労させられたM野氏だが、かれの漫画は大好きである。「オサムとタエ」などは傑作だ。

週刊連載の担当ではなく、不定期連載の担当だつたら、M野氏に対して悪い印象を持つことはなかつたらう。M野氏との仕事とは関係のない雑談は実に楽しかつた。



理不尽な書き直し

出版社を辞めたあと、しばらくレディスコミックの原作を書いていたときがあった。編集プロダクションの社長と知り合いで、その社長から書いてみないかと誘われたのである。

その社長は、レディスコミックの編集長も兼ねていた。ぼくはある号で「スリムがお好き」というタイトルの原作を書いた。主人公の女性は、恋した男がスリムな身体が好きだというので、ダイエットに励む。理想的な身体になったところ、男の言葉はその場のでまかせで、実は豊満な肉体の女と情事に励んでいたことを知る。落胆した女性は拒食症になり、さらにガリガリになって死ぬが（自殺だったかも）骨と皮ばかりの怨霊となって男の情事の場面に現れる……というような話だった。

漫画家は、原作通りに描いた。

入稿したあとに、編集長から電話があり、

「ダイエット関連の会社が広告を出してくれることになったから、きみの作品のタイトルを『痩せる広告殺人事件』に変えたからね」

というではないか。表紙にそのタイトルを載せたという。

「それでは内容と違いますよ。痩せる広告なんて出てきませんから。最初にいつてくれたら、そのタイトルどおりの原作を書いたのに」

と、抗議すると、

「いいんだよ。タイトルと中身が違ってても」

押し切られてしまった。

ところがである。この号が出来上がる前に、編集長が交代した。若い女性Zが入って、彼女にまかせることになったのだそうだ。

すると、そのZから電話がきて、

「表紙に刷られたタイトルと内容が一致しないので、すぐに書き直してください」

ぼくはこれまでの経緯を話したのだが、Zは、自分がまかされたのだから要望どおりにしてほしいの一点張り。元編集長の社長に電話したら、

「彼女にまかせたから」

それだけ。

理不尽きわまりない。ぼく以上に漫画家の女性が怒った。それはそうだろう。原作に比べて漫画を描く労力は比べるべくもない。しかも、大急ぎで描き直さなければ間に合わない。

だが、Zのかたくなな態度は改まらないので、しかた

なく修正した原作を書いた。

漫画家も描き直すほかはなかった。漫画家の女性が憤懣を抱きながら描き直すのがいかに大変だったか、同情を禁じ得なかった。

最もいけないのは、編プロの社長だ。本当にいい加減な人だった。

ずるくて卑怯な人

前の項のことがあった数ヶ月後かもつと後だったか……編集プロダクションの社長が、突然ぼくに電話をかけてきた。

「Zだけど、編集部でほかの会社の仕事をしてるんだよ。だから、クビにしようかと思ってるんだけどね」

と、いうではないか。

「いや、いきなりクビはよくないですよ。まず、ほかの会社の仕事をしないでほしいと要求して、それでも改まらなければ、そのときに考えたらよいでしょう。まずは注意しないと」

ぼくは真つ当な返事をした。

「そうかなあ……」

社長は不服そうだった。

結局、Zは辞めさせられた。

ぼくは、勤めていた出版社のHM先輩のことを思い出していた。この先輩、なにかの件について自分の批判的意見を述べると、こちらがなんと応えるか様子をうかがっている。

「そうですなあ……」とか

「なるほど」

などと、HM先輩の批判的意見を否定しない反応をただだけで、

「芦川がこう批判していた」

と、ほかでいいふらすのである。

急に先輩の態度がよそよそしくなったり、ほかの先輩がツンケンしだしたとき、なぜなのかわからなかったやがて、ぼくがいい加減な返事をしたせいで、芦川が批判していたぞといふらされていたことが原因だとわかってきた。

批判して波風が立ったときに、HM先輩は自分が恨まれるのはいやなので、ほかの人のせいになりたいのだ。なんとも卑怯ではないか。

それ以来、適当なうなずきは止めることにしていた。

だから、編プロ社長の言葉に、

「そうですなあ」

などと適当に返事をしたら、

「元編集者の芦川さんが辞めてもらうのがいいといっていたから……」

なんてことになるのではと恐れたのである。

編プロの社長も、どうもくだんのHM先輩と同類ではないかという気がした。そのときから、ぼくは彼から距離を置くようにした。

惜しい持ちこみ。

内省的で暗いが、魅力的な青春漫画が週刊漫画ゴラクに載った。ぼくがカスタムコミックで担当していた永島慎二氏も注目したのだが、その後、その作家の作品が載ることはなかった。

その漫画家の原稿を採用したO先輩に、彼はその後どうなのか訊いた。すると、

「汚い漫画を描いてきたから断ったのよ。あのあと、また持ちこむというから待っていたけど来なかったね」

ということだった。

しばらくして、その漫画家・福谷たかし氏の作品がライバル誌である週刊漫画タイムスに掲載された。タイトルは「独身アパートどくだみ荘」。ほどなく連載となつ

た。

O先輩のいつていた「汚い漫画」とは「どくだみ荘」だったのではないか！ たしかに独身男の汚い生活が描かれていたが、とても面白い。ゴラクで描いていた暗い青春ものとは正反対のギャグ漫画だ。どうしようもない青春を描いているということは共通しているが。

なんとも惜しいことをしたもんだと悔しかったが、それをO先輩にはいえなかった。

もし、福谷氏の持ちこみを、あの漫画を面白いと感じる編集者が対応していたら、それがぼくだったら……そんなことを思うと、なんとも惜しい気持ちになる。

最後に

いろいろ思い出して書いてみたが、もう三十五年以上も前のことである。

ここに書いた先輩編集者たちのほとんどは、いまから十年前から二十年前くらいに、五十代、六十代でつぎつぎに亡くなっている。

平均寿命と比べると、みな若死にといつてよいかもしれない。それだけストレスのある職場だったのか、単なる偶然か……。

(了)